

「えらそうだ」についての考察

梶原 彩子

キーワード 様態の「そうだ」 「えらい」 「えらそうだ」 評価性
規範と逸脱

1. はじめに

本稿の考察対象である「えらそうだ」は、形容詞「えらい」と様態を表す「そうだ」から構成された表現であり、対象を否定的に述べる際に使用される。例えば、部下を指して「えらそうだ」と言うと、対象（部下）が「えらくないのに、えらい人のようにふるまっている」という解釈になる。その一方で、本当に「えらい人」に対しても使われる。例えば、話者よりも「えらい人」である上司を「えらそうだ」と言うと、対象（上司）は「実際にえらいのだが、それを誇示している」ことになり、やはり話者の否定的評価を表す。つまり、様態の「そうだ」が使われているにも関わらず、話者は、対象が「えらい」ことを、既に知っている状況で「えらそうだ」を用いていることになる。

「えらそうだ」の構成要素である様態の「そうだ」は、『日本語文型辞典』で「話し手が見たり聞いたりしたことから判断した様態を表す。「きれいだ」「赤い」など、見ただけですぐわかるものには使わないのが普通。」と説明されている（2001：166）。つまり、なんらかの判断をするための要素を、話者は対象から知覚し、それを根拠として判断を下していると考えられる¹。しかし、「えらそうだ」では、この判断と要素（根拠）の関係²が成り立たない。上述したように、対象が実際に「えらい」ことを知っている状態で「えらそうだ」と言えるからである。

また、形容詞「えらい」は、複数の意味を持つ多義語³である。例文(1)の「えらい」は「立派」、例文(2)は「上だ」に置き換えることができ、「えらい」の意味は、例文(1)では「人物や行動などが普通の人より、はるかにすぐれているさま」、例文(2)では「人間の社会的地位が高いさま」を表している。そして、それぞれの評価性は、例文(1)ではプラス、例文(2)では中立である。

- (1) 山田さん、仕事しながら義両親の介護もしっかりして、本当にえらいね。
- (2) 会社では、社長が一番えらい。だから、社長の指示に皆従うのだ。

上の例文(1)(2)の「えらい」を「えらそうだ」に置き換えたものが、次の例文(1')(2')である。

- (1') ?? 山田さん、仕事しながら義両親の介護もしっかりして、本当にえらそうだね。
- (2') ??会社では、社長が一番えらそうだ。だから、社長の指示に皆従うのだ。
- (3) うちの社長はえらそうだ。

このように、「そうだ」をつけると、例文(1)のような「人物や行動などが普通の人より、すぐれているさま」という解釈が不可能になり、「社会的地位が高い」という意味に限定されてしまう⁴。そのため、例文(1')は、「仕事をしながら義両親の介護もしっかりやっていること」が「人よりすぐれている（と判断できる）」というプラス評価の意味での解釈ができず、容認度が下がる。例文(2')の容認度は低いが、例文(3)は問題なく言えることから、「えらそうだ」というとき、話者は「社会的地位が高い」と判断するだけでなく、対象の「地位を誇示するようなふるまい」に対して、「いやな感じだ」と何らかの反感を抱いていると考えられる。それで、例文(2')は後件の「社長の指示に従う」と整合性がとれず、容認度が下がるのである。

つまり、「えらそうだ」の構成要素「えらい」は、もともと多義語だが、「えらそうだ」になると「社会的地位が高い」という意味に限定され、他の意味での解釈が困難になる。それと同時に、「えらい」では、中立およびプラスであった評価性が、「えらそうだ」では、完全にマイナスとなる。

そして、「えらそうだ」と言うときには、話者は対象から「えらい⁴」と判断ができる要素（根拠）を感じ取って、「えらい」と判断しているわけではない。「えらそうだ」における話者の判断とは、「いやな感じだ」という対象に対する否定的評価であり、その判断の根拠となるのは、対象の「地位を誇示するようなふるまい」である。

以上のことから、「えらそうだ」の全体の意味は、ある程度の貢献はあるものの、形容詞「えらい」および様態の「そうだ」という構成要素の意味に完全に還元はできないことがわかる⁵。本稿はこの立場から、部分的な動機づけと関連して、「えらそうだ」を考察する。

2. 「えらそうだ」の考察

「えらそうだ」の実例を見ていくと、①実際に「えらい人（地位が高い人）」が「えらい人らしく」ふるまっている場合と、②実際には「えらいくない人（地位が高くない人）」が「えらい人のように」ふるまっている場合があることがわかる。②のタイプが否定的な評価に繋がることは理解しやすいが、①のタイプでは、対象の「地位」と「ふるまい」が一致しているにも関わらず、否定的な評価がなされている。ここから、私たちが持っている「地位」「ふるまい」に対する「規範意識」が読み取れる。そこからの「逸脱」が否定的な評価性につながっていると考えられる。

そこで、「えらそうだ」の実例から、私たちが「地位」と「ふるまい」に対し、どのような「規範意識」を持ち、何を「逸脱」として捉えているか⁶を整理する。

2.1 「えらそうだ」タイプ①:

**実際に「えらい人（地位が高い人）」が「えらい人らしく」ふるまう場合
（実際の上下関係が存在するもの）**

タイプ①では、現実社会で実際に上下関係が存在する。社会的に上位に位置する（と思われる）「えらい人物」の「えらい人らしい」ふるまいを、話し手が不快に感じているものである。

以下の例文(4)では、「通常市長がよく乗るとされている黒塗りの高級車に乗ること」という「市長という地位のある人間に似合った車に乗ること」を、話者が「必要ない」と語っており、快く思っていない様子が読み取れる。また、例文(5)では、「ベテラン俳優」に見合った「よい役をもらい高いギャラをもらう」という待遇について自ら批判的に言及している。

- (4) 「今こそ政治を市民の手に取り戻す。黒塗りの高級車に乗る偉そうな市長はもう必要ない。どんどん外に出て別府の魅力を直接アピールするトップセールスマンであるべきだ」と訴えている。

(朝日新聞 2011/4/15)

- (5) 「ええ。いつまでも偉そうな顔をして高いギャラを取っているのは平等ではないな、と。僕は今、作品を選びながら出演できる。僕がいい役を取っちゃえば、若い人のチャンスを奪うことになりますからね」

(朝日新聞 2012/1/30)

以下の例文(6)(7)では、上司と部下という、より力関係がわかりやすい関係において、立場が下の「部下」が「上司」のふるまいを強く非難している。

- (6) 菅原センター長は西宮冷蔵がミスをしたときに呼びつけて怒鳴るのが常で、自ら出向くことはめったにない。しかも、「力仕事といえば、いつも偉そうな口調で僕らをこき使うくせに、この日に限ってはフォークリフトで箱を下ろすだけでいい、あとは自分たちでやる、でしょう。ラッキーと思ったけど」

(週刊朝日 2002/02/08)

- (7) 自分は全く仕事が出来なくせに、部下を呼び捨てにし、偉そうに振る舞う上司がいます。私は短気なほうなので、つい歯向かってしまいますが、それでは自分が損だと思えます。

(Yahoo!知恵袋 2011/5/1 23:43:54)

例文(6)では、上司であるセンター長が下請けの西宮冷蔵の社員(話者)に対して、横柄な口調で接することを話者は不満に思っており、例文(7)でも、上司が部下の名前を呼び捨てにするという「地位の高さを誇示するような行動」を部下が不快に思っている。

以上の例文では、実際にも「えらい人」である対象から、話し手が知覚できるほど「地位が上」という要素が溢れている。しかし、その要素に対して話し手は、「上位であることを誇示している」と対象を否定的に評価している。ここから、私たちは(現実にも)社会的に上位に位置する人間が「上位であることを示す」ようにふるまうことは「好ましくないこと」として捉えていることが読み取れる。このタイプ①の実例の観察から、私たちが持っている上下関係に関する規範と逸脱とは、以下のようなものであると言える。

上下関係に関する規範:「社会的に上位の立場にある人間はそれを誇示するべきではない」
逸脱:「上位であることを誇示すること」

2.2 「えらそうだ」タイプ②:

実際には「えらくない人(地位が高くない人)」が「えらい人のように」ふるまう場合(実際の上下関係が存在する)

続いて、実際には「えらくない人(地位が高くない人)」がまるで「えらい人のような」ふるまいをしていることが否定的に捉えられている実例を検討する。以下の例文(8)~(10)では、ある序列の上位に位置しない人物の生意気なふるまいを、上位に位置する話者が不快に感じている。

- (8) 毎回毎回、つまらないことで反論する子どもっぽい私ですが、一方でそろそろ大人として認めてもらいたいと思っています。それを理解してもらいたくて、つい偉そうな口のきき方になってしまいます。本当にごめんなさい。

(朝日新聞 2011/10/15)

- (9) 「ここは禁煙やろうが」と、おじいさんのたばこを取り上げたのです。(中略) 「フン、息子のくせにえらそうにするな……」

(朝日新聞 2001/09/21)

- (10) 注意をすると、たいていは嫌な顔をされてしまいます。「バイトのくせに偉そうに」と思う人もいるのですが、そうした考え自体、マナー違反だと思いませんか。

(朝日新聞 2005/07/24)

例文(8)では、母に対する反論を「偉そうな口の利き方」であると話し手である子供が反省している。この例では、「母親につまらないことで反論する」ときの自らの話し方について、「えらそうだ」と述べられている。通常、日本の社会では「子供は親に口答えするべきではない」とか「子供は親の言うことをきくべきである」というような「子供」に対し、社会的に求められるふるまいが存在する。その規範からの逸脱に対して、「えらそうだ」が使われている。同じように、例文(9)では、「父親」が「息子」というものに求めるふるまいから、実際の息子のふるまいが逸脱していることを、例文(10)では、「客」が「バイト」というものに求めるふるまいから、対象のふるまいが逸脱していることを「えらそうだ」と言っており、話者と対象には上下関係が存在する。「親と子」、「客とアルバイト」といった社会的な立場について、私たちが求める規範は、世代や個人を問わずある程度共通している。タイプ②の考察から、私たちが持っている上下関係に関する規範と逸脱は、次のようなものだと言える。

上下関係に関する規範:「下位の人間は立場をわきまえて行動するべきである」 逸脱:「上下関係が逆転したかのように振る舞うこと」

私たちの社会には、「下位の人間は自分の立場に見合ったふるまいをすべきだ」という規範意識が存在し、上下関係の逆転を逸脱とみなしている。しかし、タイプ①の考察からわかるように、(現実的に)社会的地位がある人間が「それらしく」ふるまうことも否定的に受け取られることが多く、私たちの社会では上下関係についての制約が複雑に絡み合っていることが読み取れる。

2.3. 「えらそうだ」タイプ③: 実際に上下関係が存在しないもの

このタイプ⁷では、実際の上下関係は存在しない。しかし以下の例文(11)～(13)では、話し手が対象のふるまいを捉えて、「いやな感じだ」と判断している。このタイプにおいて、話し手が「嫌な感じだ」と判断しているふるまいとは、どのようなものだろうか。以下 2.3.1 と 2.3.2 で検討する。

2.3.1. 対象の人物が未成熟であること

(11) バカやっている中学時代って、実は何度もやってきました。大学生の時、大人の世界に触れて調子に乗っていた自分。新婚時代、幸せで我を忘れていた自分。後で振り返るとやっぱり恥ずかしい。今の自分も10年後には「あんな偉そうなこと言っちゃったな」と思うはずです。自分を大きく見せようとしても、どうせ空回りする。肩の力を抜いて「オレってこんなもんだ。変わらないよ」と思えばいい。前向きじゃないけど、後ろ向きでもないんです。

(朝日新聞 2011/11/26)

(12) しかし、新聞のコラムを毎週書くのは、予想以上にしんどいことでした。新聞批評となれば、当然のことながら新聞記事の中身を批判することにもなります。その批判は、わが身に返ってきます。「お前さんは、えらそうなことを書いているけれど、自分が現役の記者時代、そんなに立派な原稿を書いていたんですかねえ」という我が内なる声がしばしば聞こえてきました。

(朝日新聞 2010/3/15)

(13) 大人の社会にも不正はあります。だから偉そうなことは言えませんが、いじめを知ったなら、信頼できる大人に知らせてほしい。

(朝日新聞 2012/7/16)

ここで「えらそうなこと」とされているのは、例文(11)では「今の自分が普段言っていること」、例文(12)では「新聞の中身を批判すること」、例文(13)では、「『いじめを知ったら信頼できる大人に知らせてほしい』というメッセージを子供に対して述べること」である。これらは、どれも間違っただけではなく、むしろ社会通念上好ましいことであり、正論といえる。例文(11)(13)のメッセージは、「肩の力を抜いていけばいい」「いじめを知ったら、大人に知らせてほしい」といった「好ましい」「間違っていない」もっともなメッセージであるし、例文(12)もジャーナリストが新聞の内容を批判するというのもジャーナリズムが正しく機能している証拠だと思われる。

しかし、例文(11)では「バカやっている時代は巡る」ということが話され、

例文(12)で「対象の人物が現役時代は、立派な記事を書けていたのか」という自分への問いかけが入り、例文(13)では、「大人の社会にも不正はある」という大人社会の不完全さが示されている。このように、これらの例からは、「話者の発言内容」が逸脱と見なされているわけではなく、未熟な人間が正論を述べるのが「逸脱」として捉えられていると考えられ、ここでの規範と逸脱は、次のようなものだとと言える。

上下関係に関する規範:「成熟した人間こそ、正論を述べるべきである」
逸脱:「未熟な人間が、正論を述べること」

2. 3. 2. 対象が話題の事柄について、未経験であること

以下の例文(14)では、「雪が少ない市内の人間が大雪でパニックになっている東京新聞の人にとやかく言うこと」が規範への逸脱だと話者が捉えていることがわかる。同じように、例文(15)からは「直接体験していない自分が原爆の惨禍について語ってもよいのか」、例文(16)からは「女優という特殊な職業の自分が同世代の女性や男女格差について語ってもよいものか」といった話者の迷い⁸が感じられる。

(14)「あの程度の雪で、東京新聞の人はもろいな。県内でそう思った人は多いのではないだろうか。秋田で暮らすうちに多少雪にも慣れたのか、自分もそんな感想を抱いた。それでも、「まだ雪の少ない方の秋田市内にいるくせに偉そうな」と思い返した矢先に、

(朝日新聞 1998/01/18)

(15)つらい記憶の封印をとくとき、二度とあの原爆の惨禍を繰り返してはならないと活動する原爆の語り部たちを見ると、頭が下がる思いになる。ただ、同じ被爆者でも「肌感覚での体験がなく、何も知らない自分がえらそうなことを言っているのか」と戸惑ってしまう。

(朝日新聞 2010/6/14)

(16)「私自身は女優という特殊な職業だったので、偉そうなことは言えませんが、同世代のフランスの女性は闘って自由と平等を勝ち取ってきました。しかし、世界的に見れば、まだまだ男女格差はなくなっていませんね」

(朝日新聞 2010/10/15)

ここから、「話題の事柄を経験していること」が、私たちが「その話題について意見する」ための条件であると私たちが捉えていることが読み取れる。同等の経験をせずに、それらに言及することを私たちは「逸脱」と見なしており、

ここでの規範と逸脱は次のようなものであると考えられる。

上下関係に関する規範:「話題について経験した者が、それについての意見を述べるべきである」
逸脱:「話題について未経験の者が、それについて意見すること」

2. 4. 「えらそうだ」の評価性

1節で「えらい」は多義語であるが、「えらそうだ」になると、「地位が高い」の意味で解釈され、他の意味では解釈されないことを見た。また、評価性についても、「えらい」では中立、もしくはプラスの評価性だったものが、「えらそうだ」ではマイナスの評価性になることを確認した。このような評価性の反転は、他のプラス評価の形容詞に様態の「そうだ」が接続する場合には見られない。例えば、「親切」「やさしい」は「親切そうだ」「やさしそうだ」においても評価性はプラスである⁹。

「えらそうだ」の評価性がマイナスになるのは、2.1節と2.2節でみたように、「えらいこと」つまり、「社会的地位が上位であること」や、「ふるまい」が、他者から感じ取れるほどに対象の人物の外側に表れていることが、私たちの社会では「好ましくない」と捉えられているからだと考えられる。

3. おわりに

タイプ①と②の考察から、私たちは「下位の人間は立場をわきまえて行動するべきである」という規範を持ち「上下関係が逆転したかのようにふるまうこと」を逸脱と捉えていること、そして「社会的に上位の立場にある人間はそれを誇示するべきではない」という規範を持ち「上位であることを誇示すること」を逸脱と捉えていることがわかった。

また、タイプ③の考察で、私たちは「成熟していない人間が正論を述べること」や「未経験の人間が正論を述べること」を逸脱と見なし、「えらそうだ」と表現していることを確認した。最後に、「えらそうだ」がマイナスの評価性であることから、私たちの世界において、「えらいこと」つまり「社会的地位が上であること」が、対象の「ふるまい」にあらわれること自体が「好ましくない」と見なされ、評価性がマイナスになることを見た。

注

1 例えば、「やさしそうだ」なら、話者が「やさしい」と判断できる要素が対

象に備わっており、その要素は話者が対象から知覚できるものである。

- 2 木下 (2013) は、「そうだ」は「隣接関係に基づく推論を表す」としている。
- 3 『大辞林 (第三版)』では、次のように記述されている。
 えら・い【偉い・豪▽い】(形) [文] クえら・し
 ①人物や行動などが普通の人よりはるかにすぐれているさま。偉大だ。
 「一・い学者」「一・い指導者」
 ②高い地位にあるさま。大きな勢力をもっているさま。
 「政府の一・い人」「この土地の一・い人」
 ③程度がはなはだしい。大変だ。ひどい。連用形「えらく」は副詞的にも用いられる。「一・く疲れた」「一・い人ごみだ」
 ④非常に都合が悪い。困った。「これは一・いことになった」
 ⑤身体的につらい。苦しい。「階段の上り下りが一・い」
 [派生] 一が・る (動ラ五 [四]) ・一さ (名)
- 4 「認知言語学では、「完全な合成性」(full compositionality)は、普通は成り立たず、合成表現の意味は、構成要素の意味の総和に還元できない側面を持つとする「部分的合成性」(partial compositionality)の立場をとる。』『認知言語学キーワード事典』(2002: 33, 73)
- 5 次のような「社会的地位が高いだろう」と言い換えられる、部分的合成性の高い例も存在はするがあまり見当たらず、意味も想起しにくいと思われる。
 「6万円台でエアコンを買う」などと決めて買い物に行きます。値引きの権限を持っていそうな偉そうな人と交渉するのもこつ。(朝日2001/08/18)
- 6 ここで「規範」としたのは、ある社会において、私たちが無意識的に他者に求めるふるまい、また他者から求められるふるまいを指す。「逸脱」とは、その「規範」に一致しないふるまいを指す。
- 7 タイプ③では、実際の上下関係が存在しない。話し手は複雑な社会において、メタ認知を働かせ、何が「規範」「逸脱」になるか把握し、よりコミュニケーションが円滑に進む方法を選択する必要がある。「えらそうだ」が使われると「規範」「逸脱」が示され、聞き手の受け取り方にも方向性が与えられる。このような「えらそうだ」は言語的文脈としての働きを担っていると考えられる。文脈とは、「解釈の枠組みを与え、解釈に制約を与える情報」であり、テキストや談話での言語表現がそのような情報になるものを言う(下線部引用者)。(辻2002: 71)。
- 8 例文 (12) (13) (16) は、形式的にも「ガ/ケド」で終わる形をとっており、「前置き型ヘッジ表現 (関2012)」にあたりと考えられる。関 (2012)

は、「前置き型ヘッジ表現」の意味分類として3つ挙げているが、この3つの例文は「話し手に関する発言<これから言う、話し手自身(の身内の人)に関する発言が><自分で言うには適切ではないことが分かっている><と聞き手に示す>」例に該当すると思われる。

- 9 「えらい」の他に、「立派そうだ」「偉大そうだ」「すばらしそうだ」のような元々プラス評価の形容詞も、文脈においてはマイナスの評価性を帯びる例が多く見られ、他者から知覚できるほど外面に表れることが「マイナス評価」を帯びる人間の属性の存在が示唆される。これらの考察は今後の課題とする。

参考文献

菊地康人「いわゆる様態の「そうだ」の基本的意味—あわせて、その否定各形の意味の差について—」『日本語教育』第107号、16-25、日本語教育学会、2000年。

木下りか『認知的モダリティと推論』、ひつじ書房、2013年。

西條美紀『談話におけるメタ言語の役割』、風間書房、1999年。

篠原俊吾「相互作用と形容詞」森雄一他(編)『ことばのダイナミズム』、155-170、くろしお出版、2008年。

辻幸夫(編)『新編 認知言語学キーワード事典』、33, 71, 73、研究社、2013年。

関ソラ「前置き型ヘッジ表現に関する考察—聞き手への配慮・意識に注目して—」『日本文化論叢』、第12号、大韓日本文化学会、2012年。

辞典類

『大辞林』(第三版)、三省堂、2006年。

グループジャマシイ『日本語文型辞典』、くろしお出版、1998年。

飛田良文 浅田秀子『現代形容詞用法辞典』、東京出版、1991年。

森田良行『基礎日本語辞典』角川書店、1989年。

例文の出典

朝日新聞DB『聞蔵Ⅱビジュアル』(1979年～2012/09/14)

Yahoo!知恵袋 (検索日: 2012/08/29)